

『心打ち碎かれる時』 (要旨)

聖書箇所：マタイ 5:1~3

【1】主イエスが説かれた「幸い」

聖書の中で最もよく知られている説教といえ、主イエスの「山上の説教」です。その最初の説教の原文の冒頭は、すべて「幸いです」から始められています(5:3~11)。その説教を聞いたのが、イエスのもとに集まった弟子たち、そして群衆でした(参照: 4:18~22, 5:2, 7:28)。イエスが説かれた「幸い」とは何であったのでしょうか。今朝は5章3節の「心の貧しい者…」に注目しましょう。

【2】心の貧しい者

この「心の貧しい者」(3)とはどのような人たちのことを指すのでしょうか。心が貧しいという場合、偏狭であるとか度量が小さい、などの意味で理解されることがあります。自分のことにしか思いが及ばない人という意味なのでしょうか。そうではありません。

「心」(πνευμα)と訳された原語には「息」や「霊」という意味があります。原意は「霊において貧しい者」(新改訳2017脚注)です。

自分に絶対的な自信を持ち、あらゆる難局を自らの力で乗り越えることができると考える人の真逆にあるのが「心の貧しい人」です。つまり、大きな挫折を経験し、立ち往生してしまった状態にある人。過去の失敗と後悔のただ中にある人。そうした人は、自信を持ち、自己を信頼することが難しくなります。うつむき加減でトボトボと胸を打ち叩く…。そうした情けなく頼りない姿が「心の貧しい人」なのです。そのどこに「幸い」を見出すことができるのでしょうか？ しかし主イエスは、驚くべきことに、人の目には到底「幸い」に見えない「心の貧しい人」を「幸いです」と言われたのです。

【3】心打ち碎かれる時

今日の世界情勢において、力や富を有する国が、自国の安全を確保するという建前で、弱い国を虐げ、そこから搾取します。強さこそ幸いの道だ、と言わんばかりの振る舞いです。そうしたことは、国家と国家の関係に限定されるわけではなく、普段の私たちの人間関係にも見ら

れる姿です。人は自分の力を誇示することで、物事を優位にすすめ幸いを得ようとするのです。

自分の可能性、力に信頼して難局を乗り越えること。それ自体何ら責められることではありません。しかし聖書は、私たち人間が罪ある者として生まれたと教えます。それは、貪欲、悪意、ねたみ、殺意、争い、欺き、悪巧み、陰口…を自分以外の誰かの問題として片付けることができないことを意味しています(ローマ1:29~31)。そうした私たちが自分に「罪」があることを認めずに、自己に対する絶対的な信頼を持つならば、高慢な生き方をせざるを得ないのです。

J・ウェスレーは『『心の貧しい者』とは…疑いもなく、謙遜な人です』(『ジョン・ウェスレー説教53』)と述べました。人は、神の「正義」、そして「聖さ」を知る時に、自分が頼りにしていたものがいかにちっぽけで不完全なものであるかを思い知らされるのです。自信家であったペテロが「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから」(ルカ5:8)とひれ伏したようにです。

私たちが自分の力で何とかできると考えている間は、真に神に助けを求めることはできません。しかし「…砕かれた人、へりくだった人」(イザヤ57:15)は、自分の限界を知り、神に助けを求める、いや、求めざるを得ないのです。そのような「心の貧しい者は幸いです」と主イエスは説かれたのです。

幸いな人：「たましいが陶器(せと)のかげらのように砕けてしまった人…」(藤井武)

▷「自分が正しい。相手が間違っている」と決して譲らないというその心が打ち碎かれる時に、初めて主イエスの救いが自分に必要であると知るのである。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。」(3)

